

古川 明 著

『切手と絵でみる医学の歴史』

日本医史学会名誉会員である古川明先生は、医学切手研究の第一人者として、わが国はもとより世界的に知られる存在である。

一九〇五年生の先生が、一九九九年に、すなわち九四歳になつて『切手と絵でみる医学の歴史』と題する一書を公刊された。先生の医学切手に関する書としては四冊目にあたり前回の著『切手でみる医学のトピックス』から四年目のご出版である。

本書は大別して二つの部分より成る。一は前著に続いて『Medical Tribune』紙に連載された新発行の医学切手についての一項目あたり数百字前後の解説である。他の一は先生の最初の医学切手に関する書である『切手が語る医学のあゆみ』(一九八六年)でもとられた方法であるが、一枚の切手、あるいは絵画から関連のテーマを引き出し詳細に調査・検討を加えるもので、そのためには直接現地に向くこともいとわれない。先生が主対象にしておられるのは欧米であるから外国旅行となる。しかし先生は臨床医であるため戦時中軍医として西部ニューギニアに行かれた以外は国外に出られる機会はなかった。七十歳になつてからの外国行きは三〇を超えるという。語学に堪能であり、撮られた写真はすばらしい。むろん切手の写真は忠実な原色・原寸大で示されることが多く、

我々の目を楽しませて下さる。

さて上述の医学切手にちなんだ論説は今一回一六が収録されており、ことに本の題名にもあるように絵画を主題とされたものがいくつもある。「レンブラントの名画『解剖学講義』」「英国の名画『The Doctor』」「メキシコ国立心臓病学研究所」(同所にある壁画「心臓病学の歴史」の紹介)「名画『アテネの学堂』」などである。

正しくは伝え得ないがこの中の「英国の名画『The Doctor』」を抄出・紹介させていただくつぎのようである。

先生は一九五〇年に、一九四七年発行の「米国医師会創立百年記念」の切手を入手されたがそれは英国の名画『The Doctor』を切手化したものだった。なぜ米国の絵画を選んだのかの疑問から、この絵画の製作過程に関心を持たれるようになった。絵は病いで横たわっている少女の横で、その状況を観察している医師、そして不安げな両親の姿からなる。母はかつてヴィクトリア女王の侍女だったが今は貧しい木こりの妻となり、スコットランドのバルモラル城近くに住む。英国王室の別荘であるこの城に滞在していた女王は、娘の病気のことを知りロンドンから侍医クラークを呼び診療を委ねた。この侍医の献身的な治療により娘の病状は改善したが、これに感銘した女王は王室画家フアイルズにこの情景を絵画で再現するように命じた。

以上から古川先生はこの絵画の原物について、さらにはクラーク侍医、ヴィクトリア女王とバルモラル城、絵のひとつ

を保有しているテート美術館などについて調査され、関連のヴィクトリア女王の切手なども紹介された。『The Doctor』と称する絵は三点あり、二点はフアイルズによるもので、一点はコピーである。フアイルズの一点とコピーは米国に、一点はテート美術館にある。フアイルズの二点は左右逆の倒像になっている。米国の切手はコピーによるものを採り、一九七〇年ドミニカで発行された「英国赤十字社創立百年記念」の『The Doctor』の切手はテート美術館所蔵のフアイルズが描いたものになっている。切手になった絵はともに医師が左側にいるが、最初にフアイルズが描いた(制作年代は不明)のは医師が右側にいる。これら三点の絵画と切手はカラーで表示されているが、ヒポクラテスの誓いを表徴するものと高く評価されている。絵葉書にもなりわが国でもかなり知られるようになった『The Doctor』だが、これには古川先生の果された役割が少なくないだろう。

他方医学切手の紹介は百六項目に及ぶが、その分類と項目数は以下である。人物切手(五〇)、国連関連事項と医学(八)、医療機関・会議と公衆衛生(二二)、疾病の診断・治療・予防(二七)。このうち日本に関連のある切手は十点あまりで、その一部は外国で発行(野口英世、向井千秋など)されていて、わが国発行の切手としては「国連およびユネスコ五十年」「京都大学創立百年」「日本の近代解剖教育」「高齢者向け郵便切手」「日本茶の歴史」があるに過ぎない。

先生には医学切手に関する著が今回のものを合せ四冊ある

と前記したが、その一冊は英文である。まさに先生は国際的であり、広い視野を持つておられる。さらなるご長寿とご活躍を祈りたい。

(長門谷洋治)

〔日本アクセル・シュプリンガー出版株式会社・〒二〇二一〇〇
八四 東京都千代田区二番町二一 二番町T Sビル、電話〇三
一三三九一七二一〇、一九九九年七月三〇日、B5判 二六三
頁、本体四、七〇〇円〕

日本内経医学会 編

『黄帝内経明堂』

かつて小曾戸丈夫氏が『黄帝内経明堂』仁和寺本復元試案例」と題し、『矢数道明先生喜寿記念文集』(一九八三年、温知会)に発表したことがある。頁数の関係から、一部の経脈のツボについてのみ公表された。全経脈について、いつ公表されるか、心待ちしていたが、諸般の事情があつてか、公表されないままに終わった。

ここに紹介する書物は、小曾戸洋氏をはじめとする北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部ならびに内経医学会の諸氏が、小曾戸丈夫氏の作成した復元本をベースに、再校訂をし、句点を施し、病症を整理し、さらに詳細な索引を附して、一九九九年三月に出版する運びとなったものである。誠によるこばしい限りである。小曾戸洋氏は本書の出版によつ